

聖マタイによる福音書第5章13～20節
 於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

私は40代をほぼ東京教区の教務主事という職務に就いておりました。その仕事の内容は、教区及び各教会を実務的な側面から支えていくことが主たる任務でした。いわば、裏方の仕事を担当してきたわけです。しかしそれだけではなく、他のキリスト教会や宗教団体との連絡や共通の課題への取り組みなども、職務の1つの分野としてありました。その関係で、日本宗教連盟という団体とも関わりを持っていました。

この日本宗教連盟という団体は、5つの宗教団体によって構成されています。神社本庁、全日本仏教会、教派神道連合会、新日本宗教団体連合会、それにキリスト教連合会の5つです。日本の宗教法人を束ね、また代表して、政府の施策に対して意見を申し述べるのが、主な役割です。国に対して宗教界の公式の窓口の役割を果たしてきた団体です。

毎年、年中行事のようにして行ってきたのは、国が予算案を作成する時期になると、宗教法人の収益事業に対する税率の軽減などを、国会議員に陳情し、働きかけることが、日常的な活動でした。キリスト教では大きな収益事業を行っている教会や団体はあまり多くはないと思いますが、日本の伝統的な宗教である神社やお寺などでは、大規模な収益事業がありますから、税制の問題は一大関心事であるわけです。

1995年の地下鉄サリン事件やその他の一連のオウム真理教事件をきっかけとして、宗教法人法の改正がありました。それにより、宗教法人は監督官庁に対して収支報告書などの財務諸表を提出することが義務づけられました。この件については、政教分離の原則及び信教の自由に違反するという立場から、宗教界は一致して反対をしました。しかし、残念ながら世論の理解を得られずに終わりました。

国が設置している審議会の1つに、宗教審議会というのがありますが、宗教側の代表の委員の推薦も日本宗教連盟が行っていきました。この審議会では、脳死を人間の死と認めることの可否についてとか、臓器移植の問題を宗教の立場からはどのように見るか、或いは、クローン人間の問題についてなど、その時々トピックに政府から諮問があり、意見を具申したと思います。その答申に際して、宗教界の

見解を述べるために、シンポジウムを開催することも、大きな事業でした。しかし、問題によっては、必ずしも宗教界の見解が1つにまとまったわけではありませんでした。

この日本宗教連盟の1つの委員会の委員を仰せつかったことがありました。その委員会が、横浜のお寺を会場にして開かれたことがありました。委員長をしていたお坊さんのお寺です。由緒ある立派なお寺で、たまたま葬儀と重なったのですが、委員長のお坊さんは、葬儀は若い僧侶の方に任せて、委員会に出席されました。そのお寺の会館の中にある図書室が会議場でしたが、そこにはそのお坊さんのお経の注解書などもずらっと並んでいて、大変、学識の深い方であることが伺われました。かつては、吉田茂氏やご子息の健一氏とも親交があったとかで、人間的に幅の広い、話の面白い方でした。

委員会が終わった後、懇親会の席が中華街に設けてあり、各宗教団体の代表の委員の方々と食事と懇談の一時を過ごしました。委員長のお坊さんが座を取り持って、大変、巧みな話術で話を繰り広げ、参加者を飽きさせずに会を進めてくださいました。

その当時、全日本仏教会の事務局長をしていた40歳前後の、比較的若いお坊さんもその場に出席していましたが、委員長がその事務局長のお坊さんを酒の肴にして声を掛けました。「おい、君、最近、京都の町はどうだね」と尋ね、事務局長がそれに対して何かを言いかけると、それを言わずに、「この人は、京都には、今度会ったら必ず取っ捕まえて話を付けるという女性がいるんですよ。だから、京都の町を安心して歩けないんですよ。なあ、そうだろう」などと冗談めいたことを言って座を賑わすわけです。

そんな話をしながら、その委員長がこう言いました。「日本の宗教が救われているのは、キリスト教があるからですよ。」キリスト教があるから、日本の宗教は、まだ人々から信用を得ることができる。見放されないで済んでいる、と言うのです。お世辞も含まれていたかもしれませんが、あながちそればかりではないでしょう。宗教界の現状を深く憂いてのことだったと思います。優れた方だったと思います。

具体的には、どのようなことを指してそのような発言をされたのか分かりませんが、近代日本の宣教が始まって150年。その間、キリスト教が日本の社会の中で果たしてきた役割は、十二分に満足できるものとはまでは言えないとしても、積極的に評価しなければならない働きや貢献があったのだということを、この委員長のお坊

さんの発言から思うのです。批判だけすれば、それで総括ができたということでは、決してないと思います。カトリックにしるプロテスタントにしる、そしてわたしたちの聖公会も含めて、わたしたちの信仰の先輩たちの歩みは、日本の宗教界全体を救うような歩みだったと、このお坊さんは言うのです。「あなたがたは地の塩である。世の光である」という生き方を、教会全体がしてきたと言うのです。その言葉を聞きながら、一方では我がことのように誇らしくも感じましたが、他方、身の引き締まる思いもしたのです。

わたしたちは、日本の近代のキリスト教の150年の歴史を振り返った時に、時代の嵐の中で、地の塩、世の光としての役割を果たすことができなかつた、厳しい一時期を経験したことを忘れることはできません。過去の教会の歩みを、ただ単に外から見て批判をしようというではありません。自分自身がその場に置かれていたら、同じような態度しかとれなかつたであろうという思いを持って、自らの問題として受け止めたいのです。役に立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられなければならないような時代を経てきたことを、決して隠そうとは思いません。なかつたことにすることはできません。痛みを持って語り継いでいかなければならないし、何よりも神さまの審きの前に立たなければなりません。

しかし、そのような歴史を持ちながらも、なおかつ、地の塩、世の光としての評価を世の有識者から受けるのです。わたしたちの信仰の先輩は、そのような評価を得て、神さまの栄光を表してきました。それと同じ歩みにわたしたちも連なるのです。わたしたちが、自分自身では心許ないと思ったとしても、イエスさまが、あなたがたは地の塩だ、世の光だと言ってくれるのです。

あなたがたは地の塩になりなさい、世の光となりなさいと、わたしたちの努力目標を示してくださっているわけではありません。それを目標にして、そこに向かって頑張って励みなさいと勧めておられるわけではありません。あなたがたの今の姿が、地の塩ではないか、世の光ではないかと断言されているのです。信仰をもってこの世の中に生きている、イエスさまに従って生きていこうとする、その姿が塩の役割を果たし、光を輝かせているのだと、イエスさまが見てくださるのです。イエスさまだけではありません。ほかの宗教の高い見識のある人が、そのように見てくれるのです。あなたがたがいるから、日本の宗教は救われている、世の中が腐らないで済んでいるのだと言ってくれるのです。

塩の役割とは何でしょうか。皆さんの中にはお料理の得意の方が多いでしょうから、よくご存知だと思います。食材が本来持っている旨味を引き出し際立たせるのが塩の役割です。お汁粉のレシピにも、小豆と砂糖だけではなくて、ホンのわずかな塩を入れると甘みが増すとあります。少量の塩が入るからお汁粉の美味しさが引き立つのです。沢山はいりません。耳搔き1つの分量で十分です。それ以上入れたら、折角のお汁粉が台無しになります。塩は自己主張してはいけないのです。自らは姿形は消えてしまうけれど、しっかりと食材の中に染み込んで、その美味しさを何倍にもするのです。塩があって食材が生きてくる。それが塩の働きです。隠れて働くのです。

光はどうでしょうか。光の特徴は、塩とは違って、隠れることができないということです。輝かなければなりません。しかし、わたしたちが世の光であっても、自分の光を輝かすのではありません。「光は世に来た」というのがクリスマスのメッセージですが、わたしたちはその光、わたしたちの外から射し込んでくる光と結ばれることによって、わたしたちも光と呼ばれるのです(エフェソ5:9)。自分一人の努力で光となるのではありません。自分が、欠けたところの何一つない素晴らしい行いをすることによって、輝こうというのではありません。そうではなくて、光の源を指し示すのです。たとえ、わたしたちは暗闇の中を歩いているような思いを持ったとしても、その時でさえ、イエスさまに従って行くのです。その姿勢の中に、イエスさまの光が輝き出るのは、「自分たちの持っている光を人々の前に高く掲げよ」と、今日の福音の一節を訳している聖書がありますが(柳生訳)、光が輝くのを妨げてはならないのです。どんな時にも光に生かされていることを、言葉と行いによって表すのです。そうすることで暗闇を照らすのです。

塩は相手の中に染み通って行って隠れた姿で働きます。そして光は外から周りを明るく照らし出します。働き方は対照的ですが、どちらも人を生かす働きです。自分が生き延びようとするのではありません。地の塩としてのわたしたちの教会がここにあることによって、世の中が腐らずに済んでいる。そしてわたしたち一人一人が、それぞれの場にあつて地の塩、世の光として生きることによって、相手が生かされる。他者が、与えられたいのちに生き生きと生きるようになることができる。それが福音に生かされている者の喜びではないでしょうか。その喜びに生きるように、わたしたちは召されているのです。主に感謝。